

2017年  
4月号

# カトリック笹丘教会 教会 ニュース

福岡市中央区笹丘1-16-1  
☎761-4504 F761-4524  
広報委員会

福岡教区今年度の目標・・・「いつくしみから踏み出す第一歩」

No. 0056

小教区今年度のテーマ・・・「届けよう、神のいつくしみを共に」



私達の信仰生活



主任司祭 遠山満



皆さん、主のご復活おめでとうございます。40日に亘る長い四旬節を終え、私たちは共同体揃って復活祭を迎えることができました。そのことをまず神様に感謝したいと思います。思えば、去年の今頃は熊本で地震が起こり、福岡教区全体が右往左往しておりました。そのことを思えば、無事に復活祭を迎えることができたことは、奇跡のようです。私達を守って下さっている神様に、まず何よりも感謝を捧げたいと思います。

ところで、復活の主日から八日間、毎日、ミサの中で栄光の賛歌が歌われ、お祝いムードが典礼の中に漂っています。毎日のミサで読まれる福音も、復活されたイエス様が弟子たちにお現われになる箇所です。ただ、お現われになる、その在り方は、様々です。月曜日のマタイ福音書には、墓に行った婦人たちにお現われになり、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエス様の「足を抱き、その前にひれ伏した」と書かれています。火曜日のヨハネ福音書には、復活したイエス様が、第一発見者のマグダラのマリアに、「私にすがりつくのはよしなさい」と言われています。水曜日のルカ福音書には、復活したイエス様が、二人の弟子にお現われになり、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを割いて二人にお渡しになった、その時、弟子たちは、その人がイエス様だと気づきましたが、「その姿が見えなくなった」と書かれています。木曜日のルカ福音書には、復活して弟子たちにお現われになったイエス様が、「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。私の手や足を見なさい。まさしく私だ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなた方に見える通り、私にはそれがある」と言って、復活したご自分の身体を弟子たちにお示しになりました。

弟子たちを始めとする、復活したイエス様に会った人々は、ある時は、イエス様に触れるのが赦され、ある時は許されませんでした。またある時は、復活したイエス様をよく見ることを許され、またある時は、復活したイエス様の姿がすぐに見えなくなりました。これは、今現在、信仰生活を送っている私達にも起こっていることではないでしょうか。ある時は、イエス様の現存を強く感じて、別の時は、イエス様の現存を全く感じることはできません。そのような時、私たちは不安を感じるのかもしれませんが、信仰の諸先輩方も通った道です。狭い道かもしれませんが、イエス様やマリア様、諸聖人方の取次ぎを願いながら歩んで参りましょう。



## お帰りなさい ヒルデン神父様



笹丘で新しい春を迎える

昭和48年の暮に、神奈川県鎌倉市で日本語を学び始めたとき、私は旧東田島教会を訪問しました。油山観光道路からよく見えた教会の塔のてっぺんに立ったイエスのみ心のご像が今も印象に残っています。次の夏に来た時、東田島修道院の下の運動場に住んでいた蛙の鳴き声が睡眠の邪魔になったことが記憶に残っています。

初めて、東田島修道院に赴任したのは、35年前の1982年の1月でした。養成担当者と修練長として、ここで5年間ばかり過ごしました。マホーニ主任司祭とドワイヤ神父の園長とともに笑いの多い、楽しい共同生活の5年間だったと懐かしく思い出します。その時、新しい住所になったので、教会と修道院と幼稚園の名前が東田島から笹丘に変わりました。平野哲也神父様と今田昌樹神父様がそのころ、若い志願者として、笹丘修道院に住むようになりました。教会の青年部の数人と志願者たちと一緒に、洗礼を受けていない小学生の日曜学校をやったことは、昔の楽しい思い出のひとつです。当時の日曜学校の可愛いお子さんが今どういう大人になったのでしょうか。昨日のように感じますが、笹丘教会を出てから、もう30年が経ちます。東京の江戸川区の葛西教会に4年間、宣教活動しましたが、残りの26年間、長崎の城山小教区と聖マリア学院に長く滞在しました。笹丘に30年ぶり帰ってきましたが昔の面影がほとんど残っていません。新しい聖堂、新しい信徒会館、新しい修道院と新しい幼稚園になりましたね。すべての外観が変わりましたが、昔の面影の二つが残っています。ひとつは、毎年見事に華やかに咲く桜とつつじの花が春の栄光で、この土地をつつんでくれることです。もうひとつは、多くの懐かしい、熱心な信徒の信仰の光と愛の香りが溢れるほど、この場所の上にとどまっていることです。

故障だらけの中古車のような者で、高齢者の司祭ですが、私がこの笹丘に派遣されたことを最高の恵みと思っております。皆様の祈りと親切さに支えられながら、何かの形で、私がこの素晴らしい笹丘の信仰の共同体に仕えることができるようように心から願っております。主の慈しみをほめたたえながら、共に信仰の道を歩みましょう。どうぞよろしく願いいたします。

協力司祭マイケル・ヒルデン



復活祭・洗礼式 2017年4月15日(土) 復活徹夜祭



光の祭儀



洗礼式

ろうそくの授与



堅信式



—あなた方はキリスの光をもたらすものとなりました  
光の子として歩みなさい—



受洗おめでとうございます！  
二人の成人と二人のお子さん  
兄弟姉妹が増えました！

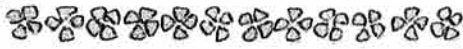


復活の主日  
ご復活おめでとう  
ございます！



ご復活お祝い会

2017.4.16(日)



ヒルデン神父様歓迎会



ホルヘ神学生ようこそ



16日(日) 復活の主日

ミサは超満員でした



祝宴の始まり乾杯！

ホルヘ神学生

ヒルデン神父様



堂々たる  
ものでした



司会は昨年に引き続き  
中学生



お祝いの手作りケーキ！  
クッキープレートに記名が！



自作自演



合唱団





## 信仰のルーツ

私の祖先 私を創った人々のルーツを語る



——その3——

2月号からの続きものです。前回までのあらすじ

ある信者さんの自分が誕生するまでのルーツを語ります。明治22年西彼杵郡外海黒崎村で生まれた筆者の祖父善之助。善之助2歳の時、一家はド・ロ神父様が開拓された田平に移住。成人した長男善之助は結婚式直前で家出しました。


時代は明治の終わり頃、田平の人達のある噂話が善之助の耳に入る。「長崎の三菱(造船所)はひどう給料の良かげな」— その時から「長崎」という街の名が、善之助の心を占めた。寝ても覚めても「長崎」のことばかり考えていた。しかし所詮は自分とは縁の無い都会だ、自分はここで一生百姓として生きるのだと諦めては、また思い詰めるということをし繰り返していた。そしていよいよ嫁をもらおうという日の直前になり、善之助はやっと決心する。彼がどのようなルートで長崎へ向かったか詳細はわからない。ただ、佐世保から先は当時すでに開通していた鉄道を使ったのだろうと思われる。長崎へ、長崎へ。

憧れの地で善之助は望みどおり、造船所に勤め始めた。仕事仲間にはカトリック信者も多く、やがて職場の近くに教会もできた。(ちなみにその教会の守護聖人は聖ヨゼフである)仕事仲間の紹介で、カトリックの家の娘と結婚した。かつて噂で聞いたように三菱造船所の給料が「ひどう良か」ったのかどうかはわからないが、4人の子どもたち全てを旧制中学や高等女学校へ通わせたことから、そこそこ良い給料はもらっていたようだ。善之助は定年まで造船所に勤め、その後の余生は大浦地区に住む長男家族の元で過ごした。

私は2歳から6歳までを祖父が住む伯父の家の隣で暮らしたが、口数の少ない祖父の思い出はあまりない。だか、一つだけ強烈に心に残っている事件がある。同い年の従姉妹とともにカトリックの幼稚園に通っていたある日、七五三のお祝いにと幼稚園で千歳飴をもらった。それまで七五三はおろか雛祭りさえ祝ったことのなかった私たちは、生まれて初めてもらった千歳飴が嬉しくてたまらず、弾むようにして家に帰った。しばらくして隣から縁側のガラス戸を乱暴に開ける音と、祖父の怒鳴り声が響いた。「こげんぜんちョ(異宗教)の祭りごとばするごとなって、日本のカトリックももうしまいたい！」そして従姉妹の千歳飴を庭に叩きつけた。従姉妹はわけがわからず、ただ「ごめんなさい、ごめんなさい」と泣き続け、私はそれを窓枠にしがみついて、カタカタと肩を震わせながら見ていた。

その後、私を含め数人の幼い孫達は、祖父善之助と一定の距離を保つようになった。  
(来月号につづく)





## 編集後記

松尾太助祭様の司祭叙階に向けての霊的花束作成の担当をすることになった。祈りのカードの一枚一枚をめくりながら集計するとき、お一人おひとりの祈りをしている姿が浮かんだ。聖堂で、家庭祭壇の前で、あるいは通勤通学の途上での姿が。いろんな司祭から、「困難の時、どれほど祈りに支えられたか」という話はよく聞く。ある雑誌でこんな記事を読んだ。ある研究機関で病人を二つのグループに分け、一つのグループのためには回復を祈り、もう一つのグループのためには特に祈らないという実験を試みた結果、祈られていることを当事者に知らせることがなくても、祈られているグループの方が良い結果が出たということだった。この実験についてはいろんな考え方があろうが、祈りの力を信じるのも信仰だろう。

『だから、あなたがたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい』（マタイ 6. 6）

いよいよ、司祭叙階式がもうすぐだ。神の豊かな恵みが満ち溢れる瞬間をこの目に焼き付けたい。（Y. K）